
西本豊弘先生を送る

山田 康弘

2013年3月をもって、本館研究部考古研究系教授の西本豊弘先生が定年退職されることになった。歴博としては大きな看板をまた一つ失うことになるわけで、その穴埋めは並大抵の努力では追いつかないだろうと、残された者の一人として率直に思う。歴博に赴任してからまだ間もない私が「送る言葉」を書くということは、大変僭越極まりないものであるが、ここで西本先生の退職にあたり、先生の略歴と業績を、簡単ではあるが、ご紹介したい。西本先生は1947年大阪府生まれで、この地で長く過ごされた後に、早稲田大学教育学部地理歴史専修へと進まれた。早稲田大学をご卒業後は、北海道大学大学院文学研究科修士課程・博士課程へとご進学された。その後、1981年に同大学院博士課程を単位取得退学されて、同年4月から札幌医科大学解剖学第2講座に助手として着任された。1983年には国立歴史民俗博物館考古研究部助手となられ、1985年には助教授に、1998年には教授とられた。

歴博ではこの間に多くの共同研究を主導された。1986年には共同研究「動物考古学の基礎的研究」の研究代表者となられ、日本における動物考古学研究の基礎を確立させるとともに、その発展に大きく寄与された。これについては、『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集に「動物考古学の基礎的研究」、同42集に「動物考古学の基礎的研究（続）」として報告がなされている。

また、1994年には歴博の特定研究として「アイヌ文化の成立過程について」を主催され、北海道礼文島浜中2遺跡および同根室市弁天島遺跡の発掘調査を行うとともに、アイヌ文化の系譜と展開について多くの研究者をまとめられた。これらの研究成果に関しては、『国立歴史民俗博物館研究報告』第85集および第107集に公表されている。また、これら以外にも旧石器時代人の最も古い痕跡を求めて、科学研究費補助金基盤研究（A）を受け、茨城県花室川流域の発掘調査も行われている。その研究領域の広さには驚かされるばかりである。

また、西本先生のご業績としては、学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」の研究代表となられ、歴博チームとして年代測定研究を牽引されたことも忘れてはならないだろう。歴博が2003年5月に発表した弥生時代の開始年代は従来よりも約500年古い」との説は、多くの考古学研究者達に衝撃を与えた。その後、数多くの議論が繰り返されたが、歴博の研究成果が覆ることはなく、むしろ着実に他の研究成果によって裏付けられるようになってきている。この間の議論を踏まえて、2004年度より文部科学省科学研究費補助金の学術創成研究費を受けて行われた研究の成果は、先生が編集された『新弥生時代のはじまり』第1～4巻（雄山閣）などに結実している。

西本先生は企画展示についても大きな足跡を残されている。1993年3月に開催された「動物とのつきあい」、2001年7月に開催された「北の島の縄文人」、2005年6月に開催された「水辺と森の縄文人」では、いずれも展示プロジェクトの代表および展示代表者を務められ、その重厚な研究

成果を展示に反映されている。

館内においては、2001年4月から2003年3月まで、総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長を務められ、研究者養成にご尽力された一方、法人化された2004年4月には国立歴史民俗博物館研究連携センター長を併任され、歴博の運営にも努力された。

館外においても、共同で動物考古学会を設立し、機関誌『動物考古学』を刊行され、動物考古学を志す若手研究者に対して発表の場を用意されるなど、後進の育成にも目を配られている。思えば、西本先生の周辺には、先生のご指導を受けに来る学生たちが必ず何人かいた。その学生たちも今や研究者として独り立ちし、それぞれの持ち場で多くの研究成果をあげておられる。まさに先生が蒔いた学問の種が、各地で開花していると言ってよい。

歴博の内部からみたご業績を紹介してきたが、西本先生の大きなご功績の一つは、非常に多くの発掘調査報告書を執筆されたことであろう。これについては主要業績目録をご覧いただきたいが、いかに多くの埋蔵文化財調査にご貢献なされてきたのかが、一目でおわかりいただけるであろう。

私が西本先生と初めてお会いしたのは、確か1987年、大学2年生の時に、早26年ほど前のことである。ということは、先生は当時まだ40歳頃であったわけで、当時すでに動物考古学の第一人者としてご活躍されていたということを考えると、筆者自身の年齢を思い不勉強を恥じるばかりである。当時、なぜ先生が動物考古学の道に進まれたのかお伺いしたところ、「貝塚を調査したときに、動物の骨が出て、それを毎回、先生これはなんですかと訊きに行くのが恥ずかしかった」と話されたことが私には忘れられない。その若き日の向上心が、やがて研究者としての道を歩まれ、動物考古学の第一人者となられて結実したことになる。誠に感服する次第である。